

## 使徒の働き 第9章 1～2節

「さてサウロは、なおも主の弟子たちに対する脅かしと殺害の意に燃えて、大祭司のところに行き、ダマスコの諸会堂あての手紙を書いてくれるよう頼んだ。それは、この道の者であれば男でも女でも、見つけ次第縛り上げてエルサレムに引いて来るためであった。」

文面からは一時も気が抜けないほどの緊迫感が伝わってくる。ひとりの者はあるグループに属する者たちに脅威を与え、さらには殺意に燃えているのである。尋常ならざる様相である。その試みの許可をエルサレム神殿に仕える大祭司から得ようとしている。大祭司を巻き込んでの試みである。イスラエル民族を巻き込んだ行為ともいえる。この試みを受ける者たちは、「この道の者」と呼ばれている。ある特別な道を生きる者たちである。主の弟子としての道を歩む者たちである。

この道は農道、市道、県道、国道の意味ではない。そこを歩くからといって脅かされ、殺意の対象になることはない。この道は主の弟子としての生き方を現わす道である。この道は主のように歩む一筋の道である。エルサレム神殿になびくのではなく、イスラエル民族になびく道でもない、それらの伝統や慣習になびくものではない。この道は主の道である。この道に立ち歩む者たちを襲おうとする者の意気込み、というより誤った怒りをあらわす文面である。

2022年6月6日